

【現代女性の髪への意識】

「おしゃれ白書 1991～2003」より

- ①染毛率は上昇。茶髪の受け入れはシニア層にも広がる。
50歳台以降でも支持者は70%以上に。
- ②60歳台以下のパーマ離れが加速度的にすすむ。
スタイリング技法はパーマからカットへ。

2004/2/13

ポーラ文化研究所

(担当: 北脇・山本)

要旨

茶髪に対する許容性が高齢者側にまで数値を伸ばしてきており、自己表現の一つとしてヘアスタイルを変えることに各年代において高い支持が得られてきていることが示されている。

髪の手入れに関しては、清潔志向が徐々に減って 03 年では 42%にまで落ち、その一方でヘアスタイリングが 27%まで上昇してきている。

過去にもワンレン、アムラー等の流行はあり、03 年でも長さの傾向はややロングヘア側へ向かっているようであるが、いまや画一的な流行や髪の長さに縛られることなく、自己表現のために顔を縁取る髪を自在に操り、かつ楽しむ風潮が垣間見られる。

．目的

ポーラ文化研究所では、15 歳から 64 歳の女性を対象とした『アンケートにみる過去 10 年間の現代女性の髪色観の変化』のレポートを 2001 年に提出した。その中で、2000 年には、3 人に 2 人は染毛しており、茶髪の許容も 88% に上っていた。

今回、さらに調査を継続しつつ、髪に対するさまざまな思い入れについてのまとめを行った。

．調査概要

【おしゃれ白書 2003】はポーラ文化研究所が 1991 年より継続している調査で、3 年毎に実施している。概要は以下の通りである。

調査対象 首都圏 30km 圏内
調査対象者 上記エリア内に居住する 15 歳から 64 歳までの女性 910 人

サンプルデザイン（単位：人）

15 - 18 歳	（高校生）	70
19 - 23 歳	（学 生）	70
19 - 23 歳	（社会人）	70
24 - 29 歳	（未 婚）	70
24 - 29 歳	（既 婚）	70
30 - 34 歳	（未 婚）	70
30 - 34 歳	（既 婚）	70
35 - 39 歳		70
40 - 44 歳		70
45 - 49 歳		70
50 - 54 歳		70
55 - 59 歳		70
60 - 64 歳		70

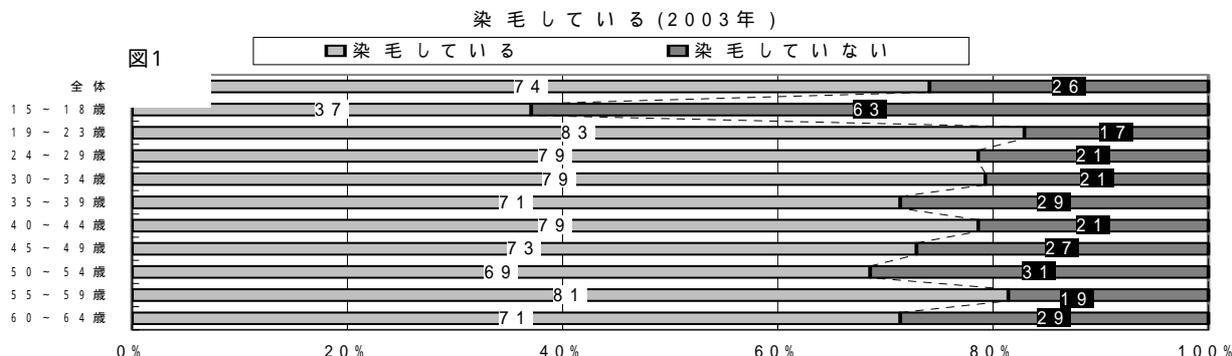
調査対象者抽出法 エリアサンプリング方式
調査方法 個別訪問面接聴取法、及び、留置き法の併用
調査期間 2003 年 6 月

現代女性の髪への意識

1. 髪色

1-1. 染毛をしている人(2003年)

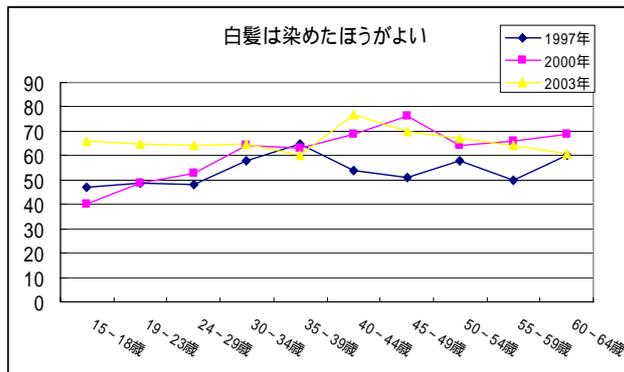
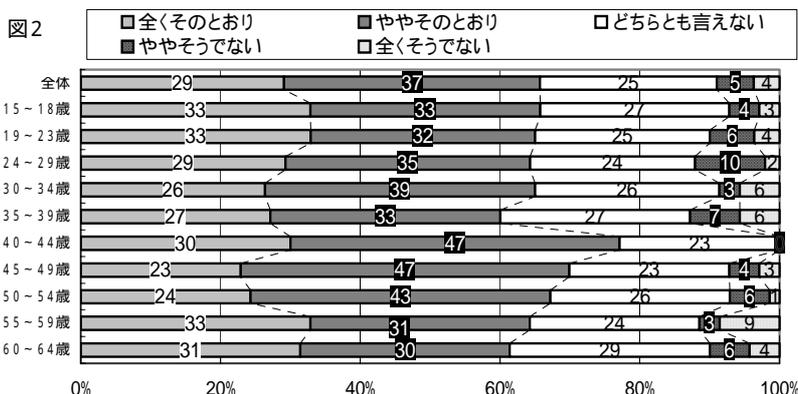
2000年において全体で63%が「染毛している」と答えているが、2003年ではさらに74%にまで増加している。【15～18歳】が41%から37%へ減少した以外、いずれの年代でも割合が上昇している。特に、【19～23歳】(83%)【24～29歳】(79%)【30～34歳】(79%)【40～44歳】(79%)【55～59歳】(81%)で、軒並み80%前後の高い数値を示している(図1)



1-2. 老いを感じさせる白髪は染めた方がよい

【全くその通り】と【ややその通り】を合わせた数字は、2000年(61%)に比べて、2003年では66%と5ポイントの増加がみられた。【40～44歳】で69%から77%と大きく増加しているのに対して、【55～59歳】で66%から64%に、【60～64歳】で69%から62%と、55歳以降での減少がみられる。シニアのリーダー的存在の女性たちで、敢えて染めないままにロマンズグレーで通す人もいて、必ずしも、白髪 老い 修正隠蔽、といった図式だけではなくてきているように思える(図2)。また、1997年、2000年、2003年のデータを比べてみると、2003年は特に若年層での白髪染めの支持が増加し、徐々に世代間の意識の差が埋まってきつつあることがわかる(図3)

白髪は染めた方がよい(2003年)



1-3. 茶髪は似合えばやっても良い

2000年で既に88%が「はい」と答えており、2003年においては89%と微増になっている。34歳以下では95%前後が支持しているが、高齢者側でも【50～54歳】で77%から84%へ増加し、55歳以降でも支持者が70%を超す【55～59歳】69%、【60～64歳】57%、71%。茶髪に対する抵抗感が高齢者側でも更に薄れてきていることが明らかである(図4)。1997年、2000年、2003年と比較して見てみると、特に40代以上の茶髪に対する支持率が年々上がってきている様子が伺われ、ここからも世代間の染毛意識のギャップが縮まってきていることがわかる。

図4 茶髪は似合えばやっても良い(2003年)

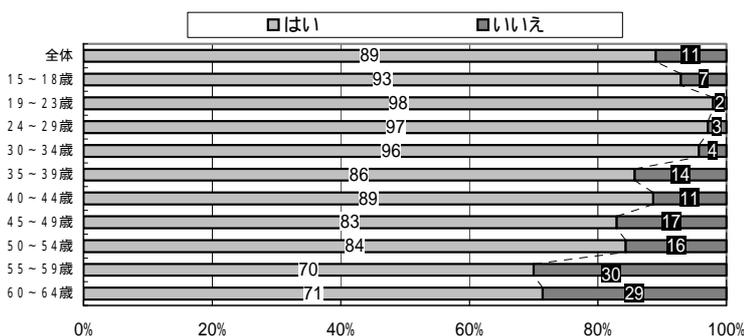
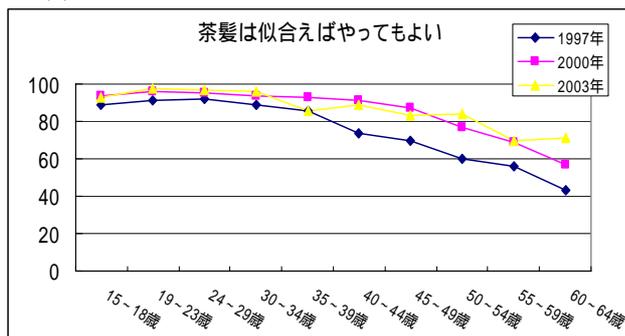


図5

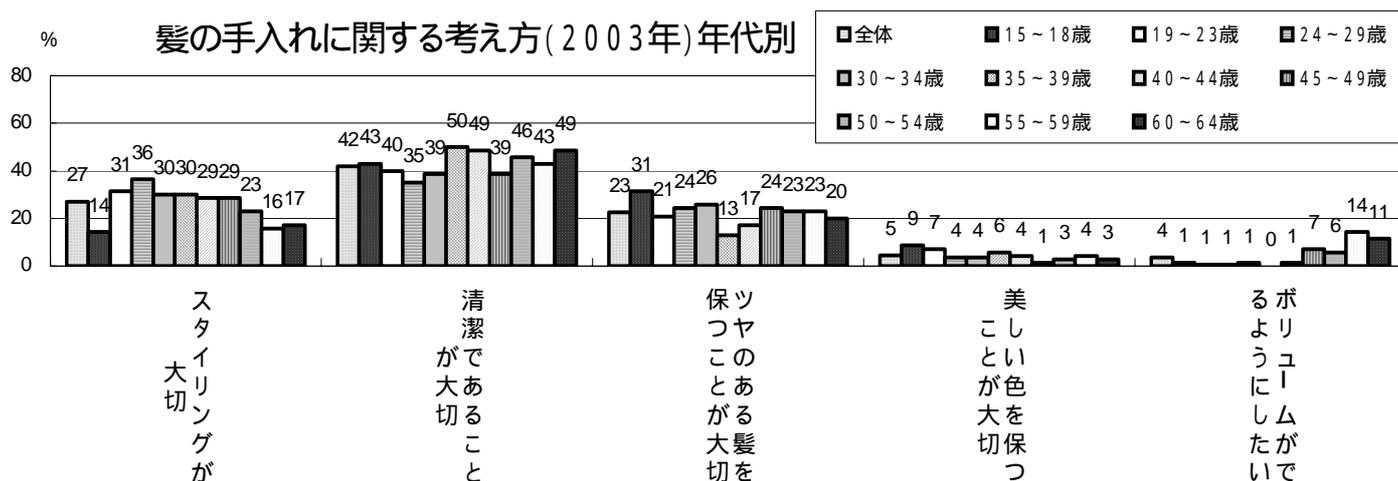


2. 髪の手入れ

2-1. 2003年集計

単回答で聞いた、髪の手入れで大切なこととして、全体では「スタイリングが思うようにできること」(27%)、「清潔であること」(42%)、「ツヤのある髪を保つこと」(23%)、「美しい色を保つこと」(5%)、「ボリュームがでるようにしたい」(4%)となっている。年齢別にみると、「スタイリング」では【24~29歳】(36%)をピークとして、高齢者側に行くにつれて漸減し、【55~59歳】(16%)【60~64歳】(17%)では【24~29歳】の半数以下になっている。一方、「ボリューム」に関しては、【55~59歳】(14%)【60~64歳】(11%)が高く、高齢者側で「薄毛」が関心事となっていることを窺わせる反面、若年者側ではほとんど数値が上がっていない。むしろ「小顔」化のためにはボリュームを消す(あるいは制御する)方向へ意識が働いていることが考えられる(図6)。

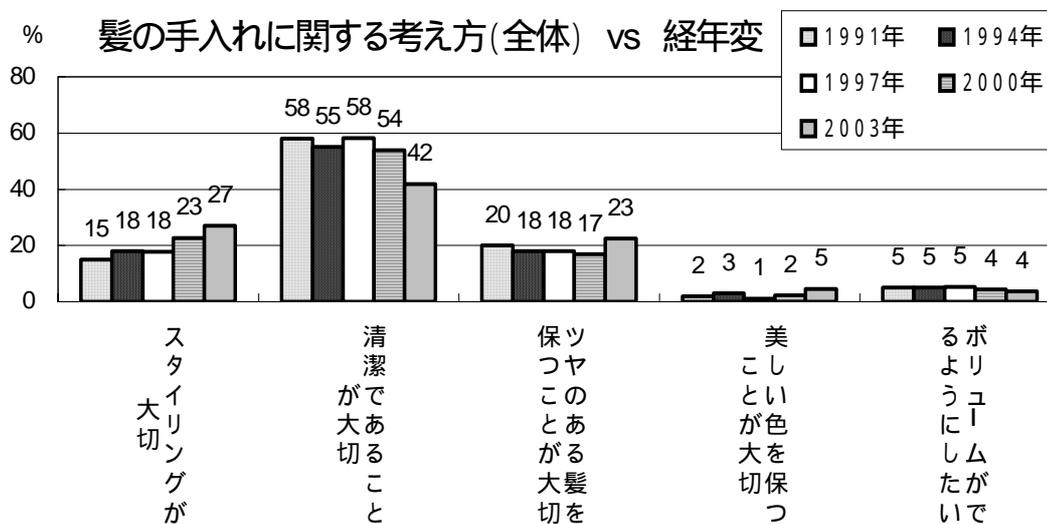
図6



2-2. 経年変化

経年変化をみてみると、髪の手入れに関して、「清潔」が常にトップを占めているが、その割合は91年58%から03年42%へと徐々にその比重を下げてきており、それに替わって、「スタイリング」が91年15%から03年27%と次第にウェイトを増してきている。「ツヤ」は20%前後から03年に23%へと若干増加している。パブル期の朝シャンブームも2000年頃には廃れ、清潔志向がもはや突出した要素ではなくなってきて、主客交替して、形、つや、色と、次第に髪がその存在を主張してきている(図7)。

図7

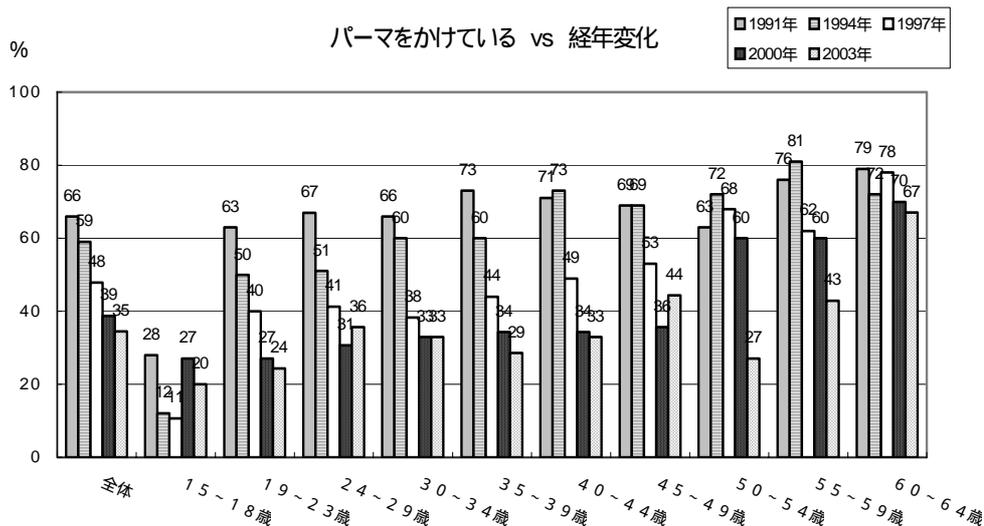


3. 髪の状態

3-1. パーマ

パーマをかけている割合は、全体では91年の66%から、03年には36%と半数近くまで減少してきている。【60～64歳】のみ、03年でも67%と高値を維持している。【35～39歳】以下の年齢層では、調査の度ごとに段階的に数値が減少していくが、それ以降の年齢層では、高齢者側ほど近年になってから減少する傾向にある。60歳代では03年においても「パーマ離れ」の傾向はそれほど強くない。但し、パーマといった場合、「ウェーブヘアにするようなパーマ」だけではなく、「縮毛矯正」などもあり、それをパーマと認識して答えているか否かは定かではない(図8)。99年のカリスマ美容師ブームが今では定着した感もあり、近年のカット技術やスタイリング技術の向上は目覚ましい。従来はパーマでしか表現できなかった動きのある変化に富んだヘアスタイルを、カットのみでも実現できるようになったことが、パーマ離れの大きな一因として考えられる。

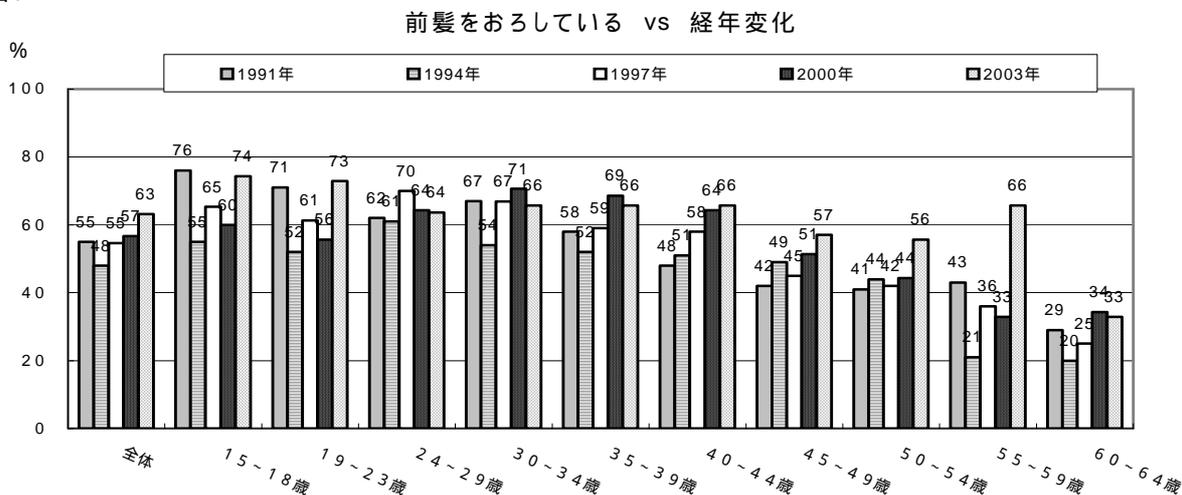
図8



3-2. 前髪をおろしている(生え際を見せていない)

前髪をおろしている割合は、91年55%から94年に48%にいったん減少した後、03年63%まで増加傾向にある。03年においては、23歳以下で70%以上、24～44歳で60%以上が前髪をおろして生え際を見せていない。45～54歳でも60%に迫る勢いであり、【55～59歳】では03年66%と一気に増加している。その中で、【60～64歳】のみ33%と低値を維持している。03年で40代以上にも前髪をおろすスタイルが増えてきているのは、パーマ離れやスタイリングで変化を楽しむために前髪をおろす若年層の流行が、美容師を通じてじわじわと中高年層にも浸透してきているからではないだろうか。中高年層に多いショートヘアでパーマ離れが進んだ場合、ストレートヘアのショートで前髪をあげるスタイルは困難なため、必然的に前髪をおろす割合も増えていくことが予想される。

図9



3-3. 髪は短い(肩に届かない)

ショートヘアスタイルは、全体では91年53%から、94年48%に減少し、以降00年54%まで増加したが、03年には44%と再び減少している。年齢別では、【19～23歳】前後を底にして、特に高齢者側で高い数値を示している。00年には、【15～18歳】で50%、【19～23歳】で39%、【24～29歳】、【30～34歳】で43%と若年側でも高い数値が出ていたが、03年では一転して、【15～18歳】で26%、【19～23歳】で24%、【24～29歳】34%、【30～34歳】で33%と大幅な減少となっており、若年層を中心に長くなる方向に向かっていることを窺わせる。40代でも03年の減少傾向が大きい。一方、60代では91～03年にかけて80%以上の高値で漸増しており、流行に左右されていない。但し、この5年ぐらいでウィッグやエクステンション(つけ毛)が浸透し、自分の実際の髪の長さや現在のヘアスタイルとの乖離が考えられるところから、髪の長さを訊いて得られる情報が限定されてくる可能性が高い(図10)。

ここで、美容院利用頻度(月1回以上の割合)を並べてみると、20代を底にして、髪の短さとはほぼ並行した動きを示している。ショートヘアほど伸びた髪に対してこまめに手入れが必要であることが示唆されている(図11)。ちなみに2～3ヶ月に1回の美容院利用は、全体では、1991年の44%から2003年の55%へと漸増している。また、月一回以上の美容院の利用頻度を45歳以上と比べると、44歳以下では半数程度に減少するのは、若年層に多い比較的長めのヘアスタイルの傾向だけではなく、技術の向上や多様化に伴う美容院料金の高額化や1回にかかる所要時間の長さにも関係があると推測できる。

図10

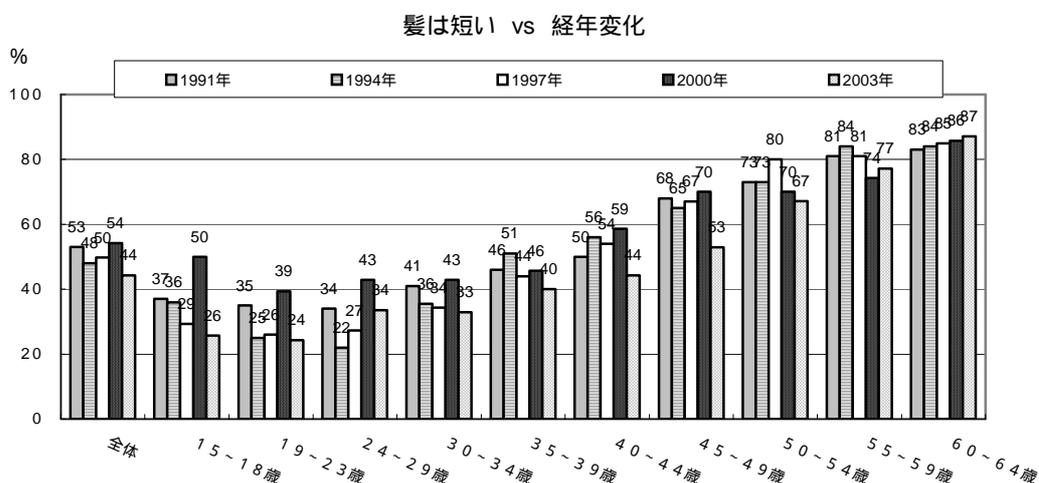
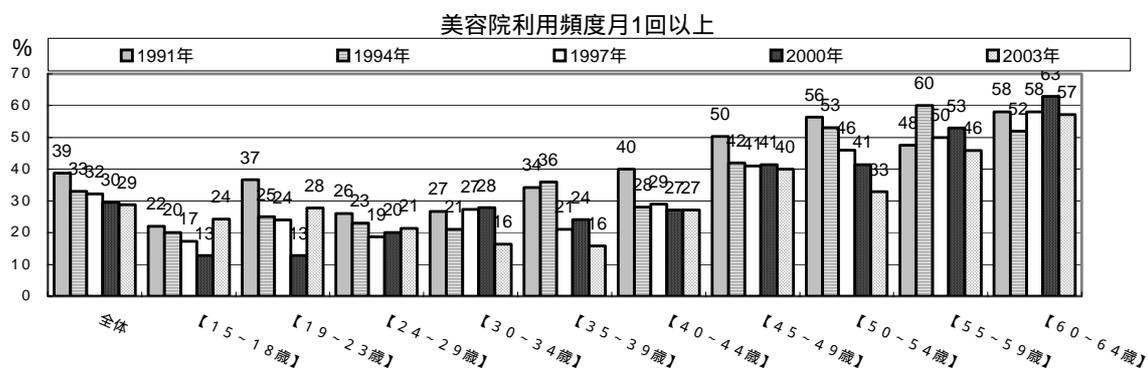


図11

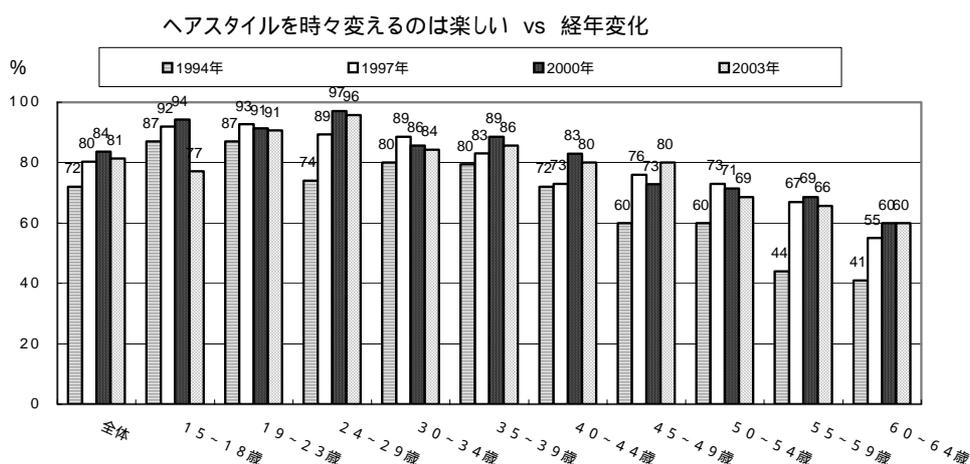


3-4. ヘアスタイルを変えるのは楽しい

全体では00年の84%をピークに、03年でも81%が「はい」と答えており、5人に4人は、ヘアスタイルを変えることが楽しいと感じている。中でも【19～23歳】91%、【24～29歳】96%と若年側で非常に高い数値をしめしており、更に40代でも80%、50代以降でも60%以上の数値が得られている。特に【60～64歳】は、「パーマ」、「前髪」、「髪の長さ」に関して時代の変化に超然としているように見えながら、「ヘアスタイル」についてはほぼ3人に2人は時々変えることの楽しさを肯定している。

既に髪色は90年代半ばから自在に染め上げ、加えて最近ではウィッグやエクステーションの進化により、髪の長さまでコントロールできるようになった。さらに、スタイリング剤の進化がこれに加わり、自己表現の手段として縦横無尽にヘアスタイルを楽しめるようになってきたことが示唆されている。

図 12



・ 結語

バブル期のワンレン、ソバージュ、93年のジュリアナ現象、94年コギャルの茶髪、96年からのアムラー、99年頃のカリスマ美容師やサロンの隆盛等々はあったものの、今日ではカットやスタイリングの技術は著しく進歩し、多様なヘアスタイルが定着した。ヘアスタイルの流行は、単なる髪の長さではなくなっている。ショートあり、ミディ、セミロング、ロングあり、ボブといい、ウルフといい、またシャギー、レイヤー等々、カット技術、パーマによるウェーブが組み合わさり、それに94年あたりから認知されてきた染髪による髪色のバラエティーが加わり、質感、軽み、束髪感、動き感、等々を醸し出している。そのような中で、97年小顔化粧品の大ヒット以来の小顔ブームはヘアスタイルを語る上での基調として生き続けているように思われる。重くならないよう、おさまりが良く、それでいてまとめすぎないよう、動きを出し、立体感を出し、ラインを感じさせるよう、カットに、ウェーブに、髪色にとさまざまな提案がなされ、かつそれらを各人が、個性や好みに応じて楽しみ、ウィッグやエクステーションも活用して自己演出する風潮が見られる。

今回の調査において、茶髪に対する許容性が高齢者側にまで数値を伸ばしてきており、自己表現の一つとしてヘアスタイルを変えることに各年代において益々高い支持が得られてきていることが示されている。